
ウォーカー

ランプ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウォーカー

【Nコード】

N3264U

【作者名】

ランプ

【あらすじ】

世界を渡る者【ウォーカー】

そんな特異な存在である優奈^{ユナ}は、今日も新たな世界へと渡ってきた。しかし、また次の世界に行こうとすると、何故かその世界から出られない。極たまにあるこの現象は時間が経てば解消する事を知っているユナは、それが解決するまで世界にとどまる事にした。暇で仕方なかったそんな彼女の目の前に現れたのは狼のような姿の魔物アブロだった。

「暇だからこの世界から出られるまで話相手になってよ」

「別にいいぜ」

孤独に世界を渡り続けるユナと、秘密を持つアブロ。彼女達を繋ぐ関係は友人？それとも……？

主人公チート設定です。とりあえずシリアス展開予定です。

1 (前書き)

『あんな事いいな出来たらいいな』な小説を書こうと思いついた。「異世界に行ける能力が欲しいな」と考えて書き始めました。

- ・テレポーター：一つの世界の中でのみ、空間移動ができる者
- ・トリッパー：様々な世界を自分の意思に関係なく無差別に渡る者
- ・ウォーカー：世界を自らの意思で渡り歩く者

一般の人が知る事はない、これらの特殊な人間を私は総称して『旅人』と呼んだ。

どこにも根を張る事は事ができない私達は、生涯どこかに定住する事はほぼないだろう。

だが、中には特異な因果に巻き込まれ、一つ所に収まる旅人もいる。私もかつてはそれに憧れたが、自らの因果がそれに結びつく事はないだろうと最早諦めた。

私は多くの旅人に出会ってきたが、その中で自らがどれほど特異な存在であるかを知るに至った。

私はウォーカーである。様々な世界、過去未来現在関係なく、ただそれらすべてを歩き続ける。そんな旅人である。

テレポーターという存在は意外と多くいるのだが、その中でもトリッパーは少ない。さらにウォーカーはそれよりも少ない。私は未だかつて自分以外のウォーカーに会った事がない。

本当にいるのかと疑った事もあるが、テレポーターやトリッパーが存在している以上、私のような存在もおそらくいるのである。

さて、私と言う存在についての説明も終わった事だし、そろそろ次の世界でも行くのでしょうか。

ミシリ……と世界が歪む。

世界を渡るには、世界その物に負荷がかかる。渡る者にも負荷はかかるが、軽い倦怠感を感じるくらいなので問題ない。

渡る際には別段何か準備がいるわけではない。呪文を唱える必要も、魔法陣を描く必要も、拜む必要も、願う必要もない。

ただ、一歩足を踏み出すのと同じような感覚で 気安さで世界を渡る。

周りの世界が歪む。そして私が渡ろうとしている世界と一部が一瞬だけ混ざり合う。強制的に作られたその接点を、私は通って渡るのだ。

歩を進める。歪んでいた風景が次第にハッキリと明瞭になる。それが完全になった時、私が無理やり作った接点も、跡形もなく消え去る。後ろを振り返れば、さつきまで本当に歪んでいたのかと疑いたくなるほど何もない風景があった。

辺りを見回せば、そこは美しい森の中だった。今回は運がいい。いきなり街中になんて現れたら、どんな扱いを受けるかはこれまでの渡りで嫌というほど体験した。

森はかなり大きく、深く美しかった。

どうやらこの世界ではあまり科学などは発展していないようだ。

その代わりもしかしたら魔法や術法が盛んなのかもしれない。

世界を渡つたらまずしなければいけないのはその世界を知る事だ。その世界においての常識、タブー、そして自分の容姿がどのように捉えられるのか。

私 優奈^{ユナ}は、黒髪黒目の容姿から、今まで悪魔の申し子や忌み子として扱われた事が幾度もあったのだ。

逆に、黒は高貴な色として扱われる世界もあつたりした。そこでは神子などと呼ばれ有難がられたが、それもそれで嫌な記憶である。一番良いのは、普通の一般人として受け入れられる事だが、さてこの世界では【黒】は何を示すのやら。

ゆっくりと、周りをつぶさに観察しながら歩いていくと、木々が疎らになってきた。そろそろ人の気配もしてきそうだ。

ユナは気配を絶ち、そつと茂みに身を潜ませた。異世界でのファーストコンタクトで最も重要なのは、相手選びである。

武器を持たず、敵意も持たない。できる事なら性別は女。さらに我俣を言うならば子供であればなお良し。

もしこの世界において私の容姿が受け入れられない凶兆のような扱いであるならば、出来るだけ逃げやすい状況の方が良いだろう。

逃走経路を確保しつつ、万が一相手が襲ってきた場合も考えて、ファーストコンタクトの相手はか弱い人間の方がいい。

茂みから辺りを見渡すと、少し先に今までの獣道とは違う、明らかに人の手が加わった小道が見えた。

その小道の先から、見たところ14、5歳の栗毛の少女が、籠を片手に歩いてくるのが見える。

(ファーストコンタクトチャンスだな)

少女の姿を見ると、どこか古めかしい雰囲気のある丈の長いワンピースのような服だ。

(『地球』という世界ではあのタイプを『中世ヨーロッパ風』と呼んでいたな……)

黒髪黒目の人種が大半を占める『日本』という国は、ユナにとって最も住みやすい世界であった。戦争もなく、飢餓もなく、科学も進んだあの国を、ユナはとても気に入っていた。

とても気に入ってはいたのだが、結局永住する事はなかった。

どこにでも行ける力を持つユナには、たった一つの場所で一生を終えるというのがどうにも我慢できなかったのである。

そうしてまた違う世界へと渡り、様々世界でユナは様々な立ち位置に収まる。

時には悪魔として

時には魔王として

時には神子として

時には勇者として

時にはただの一般人として

今まさにユナのこの世界での立ち位置が決まるのだ。

ユナの体に知らず緊張がはしる。

少女との距離ももうあと僅か。ユナが少しでも動けばその気配に気づくであろう近さだ。

ユナはわざと音を立てながら立ち上がった。

「っ！」

ユナの姿を視認した途端、それまで穏やかだった少女の表情がビシリと音を立てて凍りついた。

(あっちゃー……これ完全にこの世界では【黒】は良い意味じゃないなあ……絶対魔族とか魔王とかそっち系の扱いだよ……)

少女の表情の変化だけで大体の事は察した。そういうスキルがなければ、ユナは今まで生きてはいられなかっただろう。

「ま……」

「まっ。」

「魔族!？」

(はい魔族扱いました!。この世界では逃亡生活決定しました
……………)

大方の予想通り、この世界では【黒】は魔の属性を表す色らしい。少女の慌てようから察するに、魔族は人間とはあまり友好的な態度を取る存在ではないのだろう。

少女の顔には敵意と侮蔑、そして溢れんばかりの恐怖が浮かんでいた。

「別に取って食いやしないよ」

あまりにも敵意が丸出しな少女に、ユナは無駄だろうとは思いつつも宥める言葉を吐く。

「ふん! 魔族が何を……! 人の姿をした魔族なんて初めて見たけど、やっぱり狡賢いのね!」

(この世界の魔族は人型のはいないのか)

「魔族魔族って言うけど、私はこう見えて普通の人間だよ」

無駄ついでに、さらに無駄になるであろう訂正を入れてみる。すると少女は、その顔に歳に似合わぬ嘲りの表情を浮かべユナを嘲笑した。

「人に憧れる魔族ってわけ? あんた達みたいな化け物が人間様になれるわけないでしょう? いっそ哀れね魔族」

随分な嫌われようである。

「人語を解する魔族なんて聞いた事もないけど……やっぱり頭の良さでは人間には敵わないのね」

魔族に恐怖しつつもユナを嘲っているのは、どうやらユナが人の言葉を活せる事に起因しているようだ。人の姿と知能を持った相手に、緊張感を弱め、劣っている魔族という常識で、相手を嘲る事に酔っているようだ。

相手は人間と同じような存在のようだから自分を襲う事はないだろう。だけど結局は魔族だから自分のような人間よりも劣っている存在だ。だからいくらでも嘲っていい存在なのだ。

歪で稚拙な考えで、ユナを嘲る少女に、ユナは対照的な哀れみの目を向けた。だが少女は気づかない。ジロジロと不躡な視線でユナを見ていまだにその口に嘲笑を乗せている。

(……魔族は人の言葉を話せないのか……さらには人の形もしていないという事は、私の中のイメージとしては魔獣に近いかもしれない)

大体のこの世界の重要な事はわかった。

自分がこの世界でどう見られるか。それはこの少女の態度で一目瞭然だった。

「ねえ魔族」

「魔族じゃないんだけどね……何？」

「あんだ私のペットになりなさい。人の形してて人の言葉を話す魔族なんて珍しいもの。友達に自慢してやるわ」

(もしかしたら、今相手がこの少女じゃなくて屈強な男だったら、私の事を問答無用で捕まえようとしていたかもしれないな……)

この世界では魔族は恐ろしく凶暴な動物であるが、飼いならせばそこそこ使える獣とでも考えられているのかもしれない。

少女の顔を見れば、断られる事などないとも思っているかのよう
うに答えを待っている。

「……はあ……私は魔族じゃないし、君のペットにもならないよ」
「っ!?! 魔族のくせに! 人間様に逆らうの!?! 魔族のくせに
っ!?!」

どうやらひどくプライドを傷つけてしまったらしい。少女は顔を
真っ赤に染め何やら喧しく喚き散らしている。

(面倒な世界だなあ……別にこの世界に拘る必要もないし、次の世
界にでも行くかな)

ミシリ……と、世界が歪む音がする。その音に、少女は訳がわか
らず体を硬直させるが、ユナはそれにも構わず世界を渡ろうとする。

(さて、どの世界に行こうか……)

そうやって次の世界を探ろうとした時

パキィ……イン

(……!?!?)

歪んでいた空間が、突然弾けて元に戻った。もう一度世界を渡ろうと試みるも、結果は同じだった。この世界自体を歪ませる事はできるが、それを違う世界と繋げる事ができないのだ。

(これは……【共鳴現象】か!?)

シンクロ共鳴現象。極稀に世界との波長が合致し、シンクロしてしまうとその世界から出る事ができなくなってしまう現象だった。この現象は、時が経ち波長にズレが生じるまで続く。

(ああ……また面倒な事に……)

運がいいと思っていたが、どうやら運が尽きてしまったらしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3264u/>

ウォーカー

2011年7月19日05時55分発行